

関西民放クラブだより

太平記の旅、重ねて25回

皆川 純一(MBS)

南北朝時代の史跡を訪ねようと平成23年に発足した関西民放クラブの「太平記を楽しむ会」は、2カ月に一回の例会が満4年の去年10月で25回目を数えた。

当初は近畿圏の日帰り旅行だったが、次第に全国へと足を延ばし、今回は越前(福井県)を巡る一泊の旅。

足利尊氏方と各地で死闘を続けてきた新田義貞がついに討死した灯明寺の戦いを偲ぶのが主な目的だった。

発足以来の例会で群馬県新田荘、鎌倉、兵庫県斑鳩・湊川、敦賀市金ヶ崎城と義貞の戦跡をめぐってきたので、これで太平記の主要人物の一人、新田義貞の主な足跡をたどり終えたことになる。

その意味でも記念的な例会となった越前の旅を通して、私たちの同好会活動の一端をお伝えしたい。10月18日の朝9時に大阪駅前から貸切バスで出発。雲一つない爽やかな秋晴れに恵まれ、途中、事故渋滞で一時間近く余計にかか

ったが、午後1時前に福井城址に到着。

まず福井市郷土歴史資料館で義貞が討死時に着用していたという兜を見学し、郊外の新田塚へ。

先ほど見た兜はこの地の水田から掘り出されたものだ。往時は一面の田圃の中だったろうが、今は賑やかな町並みの中。それでもこの一角には木立の陰に小さなお堂が建ち、古びた石碑が義貞の戦死地であることを伝える。

鎌倉幕府を倒した勇将でありながら、足利方との激戦のさなか、偵察に出て、名もない雑兵の放った矢に深手を負い、その場で自害した。享年39歳であったという義貞の悲運に、思わず頭を垂れた。

ついで、義貞の遺骸が葬られた福井市外丸岡町の称念寺(当時は往上院といった)へ。

境内に福井藩が義貞の5百回忌の際に建て替えた五輪塔の墓所がある。その後、近くにある現存最古の木造天守閣が残る丸岡城へも立ち寄る。二層三階の小ぶりの天守閣の急な階段には、いつもは活発な女性陣も足を竦ませていた。

その夜の宿は芦原温泉の中でも大きなホテル「グランディア芳泉」。夕餉時には一行の中の福井のお兄さんが差し入れてくれた越前の銘酒を心ゆくまで堪能させて頂いた。

翌日は九頭竜川を遡って勝山の白山平泉寺へ。神仏習合のこの寺は養老元年(717)に越前の僧泰澄が開いた白山の拠点で、修行者のための宿坊、白山を礼拝する社殿や伽藍が境内を埋めるまでに栄えた。最盛期には48社36堂、6千の坊院を数え、僧兵8千人を擁したと伝えられる。

新田義貞の討死は平泉寺の衆徒が所領の安堵を求めて足利方に味方したのが一因だったという。

杉の原木の中を苔むした石畳が続く参道は森閑として趣が深い。

二の鳥居から拝殿を臨んで目にした木陰が埋める青苔の美しさには、思わず息をのんだ。この寺院を挟んだ南北の谷では発掘調査が行われていて、びっしりと並んでいた坊院や石段の道が一部復元されている。南谷の奥まで行ったらと、何やガサゴソ音がするので熊かど振り返ってみると、全身が黒っぽく鹿より太めの獣であった。カモシカではなかったらうか。

越前蕎麦の昼食のあとは一乗谷朝倉氏遺跡へ。朝倉氏は、新田勢との戦いを指揮した越前守護斯波高経に従って越前に入国し、土着して戦国大名になったが、織田信長に敗れ滅亡した。



一乗谷朝倉氏遺跡前でパフォーマンス

栄華の跡はさすが特別史跡の見ごたえ。帰路の車中では貸切バスの気安さもあって、とんち教室あり童謡の歌唱指導もあり；年も忘れてはしゃいでいる間に無事、大阪に帰り着いた。

この会は、2年後の平成29年末で終了する予定だが、それまでは引き続き「歴史を味わい旅も楽しむ」喜びを追い求めたい。

今年も春には伯耆・船上山、秋には筑波・小田原城への一泊の旅が待っており、楽しみにしている。